

三月書房―寺町通り

わたしの京都

河野裕子

寺町通りはいつ歩いても楽しい。わたしが歩くのは、丸太町通りと二条通りのあいだの数メートルほどの距離なのだが、両側に軒を並べているお店屋さんは一軒一軒どこを覗いてもおもしろい。何がどう他と違うのかうまく言えないが、やっぱり京都やと感心する。コクというか趣向の味わいというか、たぶんこれが伝統の持つちからなんだろうと思わせるもの。はではでしくなくて、しっとり落ち着いた感じで、何か粹で惹きつけられる。

書画骨董、古美術、筆墨、和紙、お茶の一本堂、五色豆の店、京アメ処といった、いかにも京都らしい店が並ぶなかに、通りまでほうれんそうや白菜がはみ出している八百屋や、「ゆ」と抜き出した紺ののれんの銭湯があったりするとうれしくなる。わたしが寺町通りが好きなのは、この庶民的な生活感のまざり具合の絶妙さにある。

小林祐史写場という写真館がある。ここでちよつと立ち止まって、ショーウィンドーの写真をながめる。建物が古風で趣がある。小林祐史という人は先代で、もう故人なのだが、バートランド・ラッセル、新渡戸稲造、早川雪洲などを撮った肖像写真家として知られた人だった。

下御霊神社という、いかにも怨霊鎮めの神社らしい名前の神社の何軒か先に、明るいついで現代風のギャラリーや、カーディーラーが町並みにとけ込んでいて違和感がない。

寺町通りというなんとなく静かなイメージなのだが、この通りはいつ来ても、人や車の行き来が多いような少ないような不思議な感じがする。空気の動きかたが何か一種独特なのだ。古い時間が現在進行形で流れているような。

寺町通りは昔は京都のメインストリートだ

つたと聞いたことがあるのでしらべてみた。なんと、この狭い道幅のところに路面電車が走っていたというのだ。そうすると、家の軒すれすれに走る今の江ノ電みたいな感じで走っていたのだろうか。その距離がまたおそろしく短い。丸太町通りから二条通りまで。ということ、今わたしが歩いているテリトリ―そのままである。歩いて五、六分の距離のところ、わざわざ路面電車を走らせるといふ発想が京都人なのかもしれない。路面電車が走ったのは明治二十八年から大正十五年までだという。三十一年間も走っていた電車は今どうなっているのだろう。先に書いた小林祐史写場は大正七年の創業だということだから、あの建物は路面電車が走る寺町通りのにぎわいを吸い込みながら年をとってきたのだ。

寺町通りが、わたしにとって数ある京都の通りのなかでも特別なのは、三月書房がある

からである。店名の由来は店を開いたのが三月だったからというところらしい。五十年以上も続いている書店である。知らなければ通り過ぎてしまうような地味なつくりの店であるが、三月書房は知る人ぞ知る書店なのである。

初めてこの店に入ったのは学生時代のこと、その時どんな本を買ったのかは覚えていないが、この本屋さんにはよそとは違うと思っただけだ。あの印象はどこから来たのだらう。古本屋でもなく新刊書を扱う本屋でもなく、なにかとても空気がやわらかくこまごましていて、ずっと本棚に手を伸ばすと、本のほうから、お前さんにはまだ無理だよ、とか、ああいいよ、ちよつと読んでごらん、とか言われているような感じ。

初めて行ってしばらくしてから、誰かに三月書房の主人はたいへんな学者なのだと教えられた。本は一冊一冊その主人が吟味して仕

入れをするのだと言われて、なるほどそうかと、わたしなりに納得したものである。本の品揃えが確かに独特である。本棚の本が平たく並んでいない。十坪あるかないかの店内はけっして広くはないのだが、実にもういろいろな種類の本が並んでいて、ぐるりと一回りしただけで、いっぱいしの読書家になった気分になるのはなぜだろう。社会科学の本でここに無い本はまずないという。そういう硬い本からマンガや絵本まで揃っているのに、びっしりという重圧感がなく、なんとなく本に吸い寄せられるのは、本の並べかたに三月書房独自のセンスがあるからに違いない。一見、雑然と種類のちがった本が並んでいるように見えるが、店主の本にたいする蘊蓄の深さが、ひとつの体系を生みだしていることに気づく。

学生時代からのお付き合いだからもう三十年以上がたっているのに、三月書房で本を買
うときは未だに店主からこちらの読書量の貧弱さを見すかされているような気がする。そのくせに、ほいほいとマンガ本を気やすく買えてしまうのがまた不思議なところだ。駄菓子屋に並んでいた頃の粗悪な紙と製本をそのままに復刻した『河童の三平』全巻を手に入れることができたのも三月書房の本棚だった。歌集の品揃えがいいのも三月書房の特徴である。こんなに揃っている書店は全国どこをさがしてもないはずだ。店主が座っている店の中央のレジの横の一等席が歌集の本棚になっている。その存在感と音感のよさから、現代歌枕に入るくらい三月書房は歌に詠み込まれることが多い。

いつ来ても光も音もひそかなり寺町二
条三月書房 辻喜夫「かげり濃く」

(かわの・ゆうこ「塔」選者)

